

# 旅の曲者

## ニカウさんは木を拾いに……

Tanaka Machi

文・写真：田中 真知 イラスト：bozen



【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に「アフリカ旅物語」（北東部編・中南部編、凱風社）、「ある夜、ピラミッドで」（旅行人）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、「惑星の暗号」（翔泳社）など。



## ニカウ

さんが亡くなった。1980年

代の初め、日本とアメリカを中心に大ヒットした南アフリカ製のコメディ映画『ブッシュマン』で主役を演じた、あのニカウさんである。

20年以上も前の、それも筋金入りのB級映画なのに、この映画のことをよく覚えているのは、ひとえにニカウさんのユニークな存在感のせいだった。小さな頭と華奢で小柄なからだつき。細かい皺を刻んだ、若いのか年をとっているのかわからない顔。そして不思議な柔和さをたたえた細い目。20代になったばかりのぼくにとって、その顔つきはこれまでに見たことのある、どのような人間の顔つきともちがっていた。

映画そのものは、いま思えばずいぶんと人種差別的な内容だった。飛行機から投げられたコーラの空き瓶を捨てるために「世界の果て」に行くことになったニカウさんと、白人男女のドタバタ恋愛劇がからむというような筋だった。その中でブッシュマンは「無垢な野蛮人」という西欧的なステレオタイプを押しつけてられた背景的存在でしかなかっ

た。

にもかかわらず、この映画はヒットした。とくに日本では記録的なヒットとなり、主演のニカウさんはテレビ局の招きで来日までした。ニカウさんは、ありとあらゆる番組に出演した。ニュースからバラエティ、ワイドショー、夜の歌謡番組等々。

例に漏れずぼくも、ニカウさんが「文明社会」にふれて、どのような反応や驚きを示すだろうという期待をもってテレビを観ていた。ニカウさんが遊園地に行くと言えばジェットコースターで目を回すのを期待してチャンネルを回し、ウォークマンを体験すると言えば、ニカウさんが「この箱に人が入っているのか」というのを期待して画面を見つめていた。ところが、ニカウさんはどこに行っても、ほとんど表情を変えず、淡々としている。

ニカウさんが「文明」に対して、あまりにも淡々としか反応しないことから、じつはニカウさんはソルボンヌ大学卒の秀才で、野蛮人のふりをしていただけなのだとかきたてるメディアまであった。

いつのまにかニカウさんブームも

去ってしまった。その後、映画は続編が作られた。「ブッシュマン」(蔵の人)という呼び方は差別的であるということと、「コイサンマン」なる耳慣れない呼び名に変更されたが、最初のときのようなブームにはならなかった。

しかし、ブームが去った後も、ブッシュマンという存在はずっと気になってきた。やがて民族学の本などを読むようになって、ニカウさんが来日していた頃には、まったく知らなかつたことを、あらためて知った。ブッシュマンがアフリカ太古の民であつたこと。かつてはアフリカ一帯に広がっていて、西アフリカのバンツー系黒人の侵入や、白人の入植に伴って、行き場を失って、やむなく不毛のカラハリ砂漠に追いやられたこと。

しかし、なによりショックだつたのは、あの映画にカリカチュアされて描かれたような素朴な狩猟採集の暮らしをしているブッシュマンは、すでにほとんどいないという事実だつた。国家の安定した税収を確保するために、多くのブッシュマンの住むナミビアやボツワナでは定住政策

がとられてきた。しかし、彼らが何万年もつづけてきた狩猟採集という生活形態は、多くの人数が一箇所に定住しては成り立たない。各家族が広い範囲に散らばって住むことによつて、食糧が確保されてきたからである。

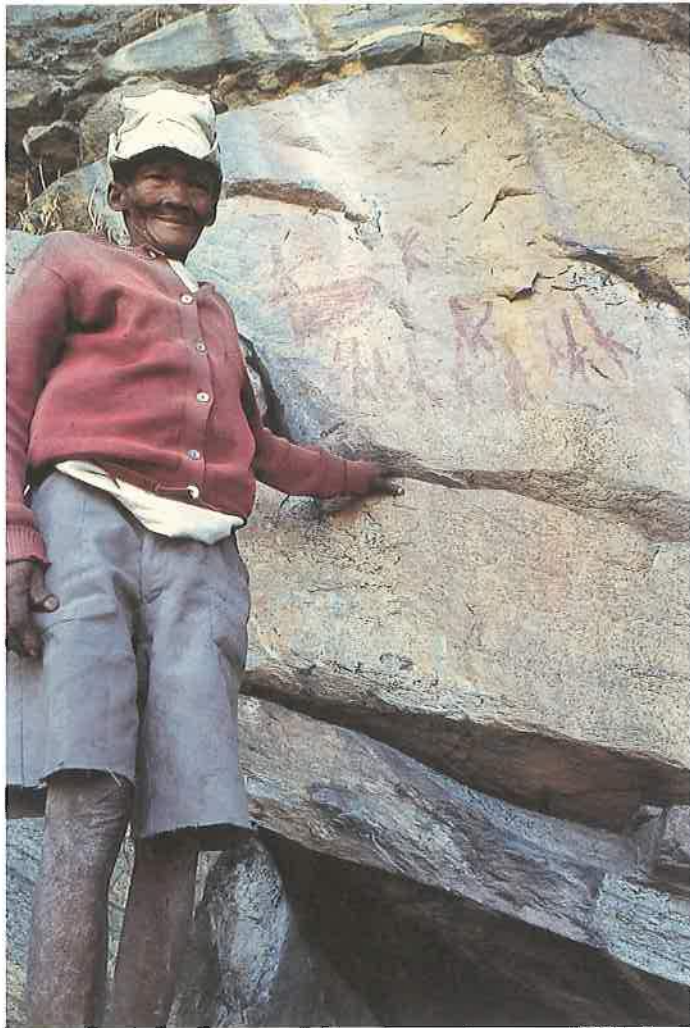
ところが定住政策は、彼らが何万年もつづけてきた、このような生活の伝統を根底からひっくりかえした。狩猟採集ができなくなるということは、たんに生活の変化だけを意味するわけではない。その伝統の中

で培われてきた、ブッシュマンならではの哲学や知恵、文化そのものを奪うことになるのだ。

その結果、ブッシュマンはどうなったか。現金経済と酒がブッシュマン居留地に入り込み、犯罪が増え、伝統はおどろくべき勢いで失われていった。そんな事情を知ると、彼らの生活を理想化すること自体、無責任な懐古趣味にほかならないことがわかる。さらに当時の南アフリカのアパルトヘイトという背景を知ったうえで、あの映画を観るととても笑

えない。笑えないどころか、怒りすら覚えてくる。

それから10年以上たつてポツワナの砂漠の村でブッシュマンに会った。彼らはごくたまにやってくる旅行者相手に、手製の首飾りや人形を売っていた。村にはニワトリや山羊もいたし、小さなトウモロコシ畑もあった。かつては家畜も持たず、畑を耕すこともなかった彼らの暮らしは、この半世紀で劇的に変わったのだ。



先祖の描いた岩壁画の前に立つブッシュマンの男性

けれども、彼らの知恵や文化がなにもかも失われてしまったわけではないことも、ここに来てわかった。ブッシュマンの男性と草原や丘をいっしょに歩いてみて、彼らが周囲の自然に対して驚くほど豊かな知識と感受性をもっていることに気づかされた。かすかな足跡、ほんのちよつとした気配から、そこにどのような動物がひそんで

いるか、そこで昨日ながあつたのかを、彼は言い当てる。そして独特の柔和さをたたえた目を細めて、大きな声で笑った。

日本でのブームがとくに過ぎ去つた後、ニカウさんは香港映画などにも出演していたらしい。その内容は、キョンシーと共演したりといふ、相も変わらず荒唐無稽なものだつたようだ。そんな噂を聞くと、ニカウさんは大丈夫だろうか、と少し心配になつた。けれども、あのニカウさんの淡々とした表情や、カラハリで会つたブッシュマンの男性のことを思うと、彼らの中には、けつして失われぬ生き方の核心のようなものが存在するのではないかと信じられる気もした。

だから、今回のニカウさんの死に方を聞いたときには、どこかほつとする思いだつた。ニカウさんは木を拾いに行つていて、帰つてこなかった。家族が見に行くと、死んでいたといふ。無責任な言い方もしれないけれど、このニカウさんの死は、とても正しい、喜ばしいとさえ言える死のように、ぼくには思えてならなかつた。